

- ☒ 話すこと ☒ 書くこと ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用
☒ パフォーマンステストでの活用 ☐ 課外活動での活用

実践の
ポイント

AI英会話ソフトの活用による対話量の充実と個のつまずきに応じた丁寧な指導の往還

実証概要

- <校数>2校(中学校:2校) <人数>260名
 <学年>中学校:第2、3学年 <アプリ等> ELSA for Schools(ELSA Japan 合同会社 / 駿台教育センター株式会社)
 <AI機能について>
 1 AIによる英会話機能…AIとのフリートークを通じ、目的・場面・状況に応じた表現力を育成。
 2 発音矯正機能…音素レベルでの精密な分析と即時フィードバックにより、改善点を可視化。
 3 英語力判定機能…CEFR基準に基づく「ELSAスコア」により、客観的な英語力を判定。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AI活用による英語の対話量の充実

1人1台端末を活用し、授業内および家庭学習でAIとのやり取りを行う機会を継続的に設定した。目的・場面・状況を意識したテーマで対話を行うことで、生徒は英語で話す量を増やし、間違いを恐れずに話す経験を積み重ねることができた。また、AIから発音や表現、内容面の即時フィードバックを受けることで、その場で言い直しや改善に取り組むことができ、「話せた」という実感の蓄積につながった。

●教師による個のつまずきに応じた丁寧な指導

教師はAI英会話ソフトの管理画面を通して、生徒の利用頻度、発話内容、誤りの傾向を把握し、語彙・表現・発音等につまずきの見られる生徒に対して重点的に助言した。AIでの練習後に、ペアや全体での言語活動へ接続し、必要に応じて再練習やモデル提示を行うことで、生徒一人一人の課題に応じた指導を充実させた。

上記の取り組みを往還させることで、言語活動を通じた指導の充実を図った。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

中学校の卒業レベルとされるCEFR A1レベル以上の割合が導入時(7月)の23.8%から、最終判定(12月)には59.9%へと約2.5倍に増加した。
CEFR B1レベル以上に到達した生徒は8人から20人へと2.5倍に増加し、上位層の伸びも顕著であった。

②児童生徒の関心・意欲の変化

多くの項目で全採択団体の中2・3年生平均値が現状維持または微減しているのに対し、足立区は着実に数値を伸ばした。

中学2・3年生	足立区	全採択団体
英語を話すことが得意	+4.5pt	-0.5pt
英語を話すことは緊張する	-9.0pt	-0.5pt

③教師の指導の変化

AI英会話ソフトに蓄積された学習履歴や判定結果等を基に、生徒の誤りの傾向を把握し、課題設定や支援方法を見直すようになった。
教師の役割は、単に対話を促すことにとどまらず、データを活用して学習状況を見取り、個に応じた指導・支援を行う方向へと変化した。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●モデル校からの発信

令和8年1月に公開授業・研究協議会を実施。AI活用リーダーが中心となり、AIとの練習をいかに「自分の考えを英語で表現する言語活動」に繋げるかの授業デザイン及びその実践の様子を区内英語科教員へ提示した。
【第1回】令和8年1月19日(月) 足立区立A中学校 参加管理職…6名 参加教員…35名
【第2回】令和8年1月23日(金) 足立区立B中学校 参加管理職…4名 参加教員…25名

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●成果

足立区の中学生の目標水準(CEFR A1レベル以上)の到達率が2.5倍となり、上位層も大幅に拡大した。
AIとの対話で「話すこと」への抵抗感が取り払われ、生徒自ら進んで英語を発話する学習態度へと変容した。

●今後の展開

本事業の成果へとつながった「AI活用による英語の対話量の充実」、「教師による個のつまずきに応じた丁寧な指導」の往還の取り組みを継続しながら、令和8年度は、AIでの練習を人との言語活動へ接続する授業デザインをモデル校において普及・検証し、令和9年度以降の全校展開に向けて活用事例や指導の指針を蓄積する。